



知るを楽しむ  
尾道美の回廊

ここんむそう  
13年間19連勝古今無双

碁聖  
ご せい

# 本因坊 秀策

ほんいんぼう しゅうさく



## 絶対碁感

秀策の才能に気付く母  
桑原虎次郎から  
本因坊秀策へ  
囲碁って楽しい  
5つの基本ルール  
耳赤の一手  
囲碁十訣

## 百五十年來の碁豪

御城碁 19連勝無敗  
江戸・本因坊家入門  
三原城主  
浅野忠敬との手合わせ  
橋本竹下との出会い  
本因坊秀策囲碁記念館  
秀策ゆかりの地

「百五十年來の碁豪」と言われるほどの天才が因島外浦町に誕生しました  
幼名・桑原虎次郎、後の本因坊秀策でした

本因坊秀策(文政12年5月5日-文久2年8月10日)(1829-1862)は江戸時代の囲碁棋士。  
備後国因島(現・広島県尾道市因島外浦町)出身。

秀策は、わずか9歳で日本最高峰の本因坊家入門し、20歳で第14世本因坊跡目を継承。  
そして囲碁宗家の強豪が競い合う「御城碁」では空前絶後の19連勝(無敗)という偉業を成し遂げるも、

34歳の若さで亡くなりました。棋力に優れるだけでなく、  
人格的にも学徳にも優れた人物でした。

まさに「碁聖」の名にふさわしい偉業と生涯だったと人は語りつぎます。

彼の成しえた偉業の背景には、因島の海、尾道の風情と風景と両親。

そして偶然なのか必然なのか...

出会う人とのつながりが秀策を支え、その才能を開花させていったのでした。



「秀策自筆扇(部分)」



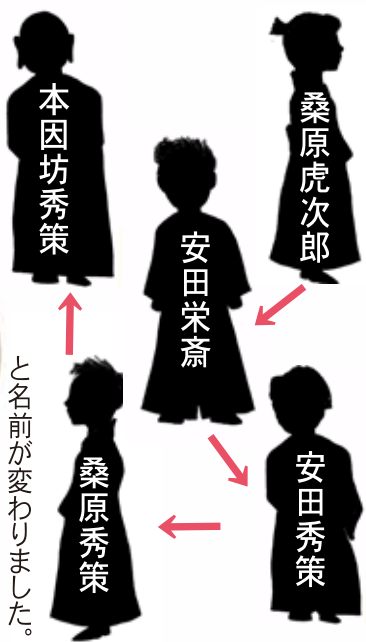
# 「百五十年來の碁豪」

本因坊秀策は棋力に優れるだけでなく、人としても、学問にも優れた人物でした。まさに「碁聖」の名にふさわしい秀策の偉業と生涯だ。たとえ人は今も語り継ぎます。

## 虎次郎生まれる

### 碁との出会い 一歳〜八歳

今から200年の前の事百八十二年前の五月五日。因島の外浦「百五十年來の碁豪」と言われる天才が誕生しました。父・桑原輪三、母・カメの次男として生まれたその子の名は、幼名・虎次郎、後の本因坊秀策。虎次郎は、その後の人生の中で安田栄齋、安田秀策、桑原秀策と名前を変え、やがて人々に本因坊秀策と呼ばれる事になります。



と名前が変わりました。

秀策は、わずか九歳で日本最高峰の本因坊家入門し、二十歳で第十四世本因坊跡目を襲名。そして碁宗家の強豪が競い合う「御城碁」で空前絶後の十九連勝(無敗)という偉業をなしてあげましたが、三十四歳の若さで「コレ」がかり死んでしまいました。

## その当時栄えた

### 港町・尾道



東の大坂、西の下関。その中間の港町・尾道はとも栄えた町でした。広島浅野藩にとって尾道は特別な商業都市でした。



「本因坊秀策肖像画(部分)」

九月の尾道。ある秋の日、良神社で年に一度の奉納相撲が行われていました。そのにぎやかな境内に、一組の親子の人影が。五歳になった虎次郎と、父・輪三の姿がありました。人ごみの中でお父さんとはぐれた虎次郎は、輪三の取引先・大紺屋のお店に誘われるように迷い込みました。そこで碁をする大紺屋の渡橋源兵衛と橋本竹下の勝負に虎次郎が出会ったことで彼の人生が大きく動き出すのでした。橋本竹下と橋本吉兵衛との出会いは、彼の生涯を決定したといっても言い過ぎではないのです。秀策と碁に対して、助言や援助を生涯にわたり惜しみなく続けました。



虎次郎にとって最も大切な事は、三〜五歳のころの経験だったのでしよう。虎次郎は幼い頃から碁石で遊ぶのがとても好きな子でした。どんなに機嫌が悪い時でも、碁石を持たせると不思議と機嫌がよくなったと言われています。



ある日、お父さんが、いたずらをした虎次郎を押し入れに入れます。虎次郎は暗い押し入れが怖くて泣き出しましたが、やがてその泣き声が聞こえなくなりました。どうした事かとお父さんとお母さんがそっと押し入れをのぞいてみると、なんと虎次郎、中にあった碁盤に碁石を並べて遊んでいたのです。

## 「絶対碁感」

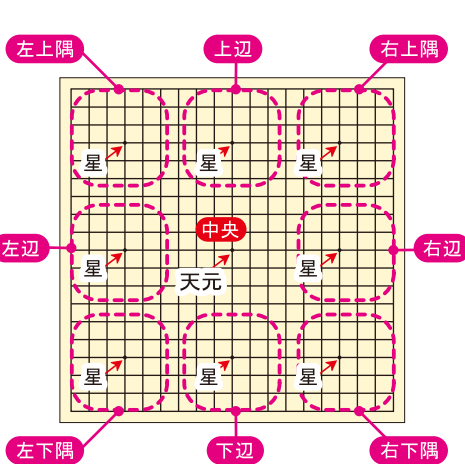
これはきつと、虎次郎には本物の碁の才能があるのではと…お母さんは虎次郎に碁のルールを教えました。



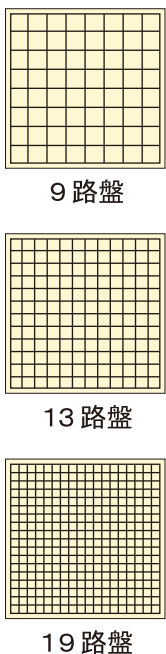
レリーフ「母之教」

母カメも碁打ち、小さい虎次郎に礼儀作法を教え、因島の凄腕たちとの対局のため連れてまわったのですが、それも数ヶ月で終わります。なんと虎次郎、だいの大人を相手に連勝を重ねていくのです。島の凄腕が弱いのではなく…虎次郎が強すぎたのでした。

## 碁盤の位置の名前



碁盤には、石を打った位置を示すための名前があります。ルールと合わせて一緒に覚えよう!



- 基本ルールは**
- ◆ 石は線と線の交点に打つ
  - ◆ 打った石は動かさない
  - ◆ 石は2人で交互に打つ
  - ◆ 相手の石を囲めば取ることが出来る
  - ◆ 相手より陣地が広いほうが勝ち

虎次郎が「碁の神童」と呼ばれ始めた頃、三原城主・浅野忠敬公の耳にもそのうわさが届くのでした。浅野公はこんでもなく碁が好きなきなことまで有名でした。竹下の口利きで虎次郎、何とお殿様との対局に話が進みます。お城に上がるために、虎次郎は因島の桑原の家を出て、父の実家の安田家に入り、名を安田栄齋と改めました。三原城主・浅野忠敬公とお田通りと初手合わせを無事に終え、栄齋の堂々とした態度に、浅野公も竹下も満悦。すっかりお殿様に気に入られた栄齋は、三原城に茶坊主として日々出入りをするようになります。







# 「本因坊秀策」が誕生

## 第十四世本因坊

### 跡目の襲名

#### 「虎に翼」 十八歳〜二十歳

秀策が本因坊に入門。「安芸小僧」とあだ名で呼ばれつつも、その棋力を見抜いた丈和は秀策を見て、本因坊道策以来、百五十年ぶりの逸材と絶賛。



勉強に明け暮れる秀策



本因坊丈和

やがて秀策に本因坊家の跡目(二跡継ぎ)の話が湧き上がりま

した。秀策も、この時ばかりは気がとがめました。本来は三原藩主の浅野公より禄(二給料)ほうびをもらい、本因坊家に入門をしていたからです。本因坊家からすると秀策は預かり弟子だったのです。秀策はお殿様に申し訳がないと跡目になることを、かたくなに断り続けました。しかし、本因坊家も引き下がらません。そこへついには脇坂淡路守を仲立ちに広島の本家筋から、三原の浅野の殿様を説得。こうなることさらに秀策もごつともならず、跡目を引き受けぬことになったのです。

秀策に対する師匠丈和のたつての願い、本因坊家の跡目の継承と娘・花との結婚でした。跡目になると同時に六段に昇格。ここに「本因坊秀策」が誕生したのです。本因坊家に立派な跡目が決まってホッとしたのか、次の年、丈和・丈策が続けて亡くなった

てしまします。その翌年、そして念願の御城碁に初出場したのが二十一歳のとき。それから十二年間、秀策は偉業中の偉業、御城碁で十九連勝するのです。

# 「耳赤の一手」

十八歳、四段の秀策は、大坂で四家の一人、井上幻庵因碩との伝説的な対局を行います。

因碩にとつては、丈和と数年前に名人碁所を争って負けた、宿敵の本因坊家の秀策との対局。そして結果は、秀策の勝利。その名も「耳赤の一手」。秀策の名を不動にした一局でした。



127手目 全ては変わった

## 「三度目の帰郷」

跡目継承と結婚の報告の為に、二度目の帰郷。挨拶のため尾道の橋本竹下を訪ねたときのこと。橋本竹下からの提案で、新築されたばかりの真新しい木の香り漂う慈観寺・本堂で、本因坊の兄弟子でもあつた岸本佐一郎と公開対局を行いました。

# 「御城碁」とは

## 無敗の十九連勝

### 真剣勝負 二十一歳〜三十三歳

「碁打ち」は親の死に目に会えぬもの……御城碁とは、江戸時代に因碁の家元四家の棋士により、徳川将軍の御前にて行われた対局。寛永三年(一六二六)頃に始まり、幕末の元治元年(一八六四)に中止となるまで、二百三十九年余りに渡って続いた、棋士にとつて、もつとも真剣な勝負だったのです。全部で五百三十六局の対局が行われ、出仕した棋士は六十七名。代表的な成績としては、本因坊秀策の十二年間、十九連勝が有名です。対局が一日では終わらないこととが多いため、事前に対局を行い、当日将軍の御前では、その棋譜を対局者が並べるのみにする「下打ち」という方式が、本因坊道策の時代に始められました。「御好み」として当日将軍のお声掛かりで、その場で行われる対局もありました。文久元年(一八六一)、秀策三十三歳。本因坊家に届いた竹下からの手紙。それは母・カメ危篤の知らせでした。知らせを受け、とても動揺する秀策。しかし、秀策は動揺を一生懸命抑え、心を落ち着け母に手紙を書くのでした。そして御城碁へと向かう秀策。一度御城碁が始まると一週間掛かることもあります。

# 囲碁の基本ルール その五 陣地が広い方が勝ち

囲碁の勝敗は、陣地の広さにより決まります。陣地のことを「地」といし、地の数を数えるときは「目」を使います。次の図で、陣地の数え方をみましょう。



黒の地 黒 25目

1目差で白の勝ち!

白の地 黒 26目

その間、外部の人とは一切会うことが出来ないで、人は「こい」の語です。「碁打ち」は親の死に目に会えぬもの……

「碁打ち」は親の死に目に会えぬもの……まさしく秀策もその通りになったのでした。この年の御城碁では、秀策は特別に強かったと記録されています。十二年間で負けなし十九連勝。空前の大記録、その話は稲妻のように日本中にかげめぐりました。しかし御城碁の十九回目の勝利を報告する秀策の手紙が因島に届く頃、彼の願いも虚しく母・カメが亡くなったのです。秀策は喪に伏し、百日間の精進生活に入ります。自分の悲しみを抑え、父への気遣いの手紙をしたためる秀策でした。



親不孝をお許し下さい







# 対局を始める前の心構え **囲碁十訣**

## 不得貪勝(むさばれば勝を得ず)

むさばりは打ちすぎにつながり、敗局につながる。地と勢力のバランス、  
 彼我の石の強弱のバランスを保って打ち進めたい。

## 入界宜緩(界に入りてはよろしく緩やかなるべし)

消しの心得とされている。相手の勢力圏内で急戦を挑むなどはもつての  
 ほか、まず自分が攻められぬように、限界以上は踏みこまないことだ。

## 攻彼顧我(彼を攻めるには我を顧みよ)

鹿を追う猟師のように攻めては、いつの間にか山奥まで入り込み、引き返せ  
 なくなる。彼我の距離を計りながら、自分の弱点を補いつつ攻めるべきだ。

## 棄子争先(子を捨てて先を争う)

石を捨てて先手を取れ、と教える。ただ漫然と捨てるだけでなく、それが  
 主導権奪取につながる捨てる石でありたい。

## 捨小就大(小を捨てて大に就け)

理の当然だが、大小の区別はそう簡単に見分けがつかない。いつでも立  
 ち止まり、着手の大小を考えるようなら冷静なペースを守れるだろう。

## 逢危須棄(危うきに逢えばすべからず棄つべし)

棄子争先と同じく捨て石の勧め。この方は補強しないで石を捨てるだけ  
 でなく、積極的に石を取らせる、捨て石の手筋を強調したものだ。

## 慎勿軽速(慎んで軽速なるなかれ)

ゆっくり考えて打て、というよりは一手一手、先入観を捨てて、新しい  
 目で局面を見直す教えである。

## 動須相応(動かばすべからず相応ずべし)

着手には必ず目的がある。相手の着意を察し、それを上回ってこそ自分  
 の碁が打てるだろう。

## 彼強自保(彼強ければ自ら保て)

相手の強大な場所では、まず整形を考える。それが石の強弱のバランスだ。

## 勢孤取和(勢い孤なれば和を取る)

入界宜緩と同じく、石の強弱のバランスを強調する。自分の弱い場所で  
 戦ってはならない。

## 中止となった御城碁

本因坊秀策は亡くなった後、その  
 の功績が讃えられ「碁聖」と言われ  
 ました。御城碁は、



黒船来航、そして明治維新の後の横浜

幕を下ろしました。止され、その歴史に  
 やがて徳川幕府も終わり、新しく  
 明治政府が出来ました。碁碁の家  
 元四家は一つになり、それが日本  
 棋院の始まりとなりました。

## 日本棋院

秀策の死の年から、世情の  
 不安を背景に御城碁は中止と  
 なり、以降再び行われること  
 はありませんでした。幕府が  
 政権を朝廷に返上し、江戸時  
 代が終わりを告げたのはその  
 五年後の事。やがて日本は明  
 治から大正時代に移っていき  
 ます。大正十二年(一九二四)、  
 碁碁を広く大衆に広めるため  
 に、日本棋院が創立。碁打ちた  
 ちが一致団結して碁碁の文化  
 の発展を願ったのです。

## 中国で生まれた碁碁は、

七世紀に  
 日本に伝わり、  
 日本文化に  
 息づきました。



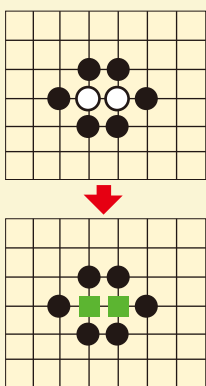
平安時代の貴族の女性たちが、碁で遊んでいる様子が描かれています。

源氏物語絵扇面散屏風「空蝉」(浄土寺蔵)

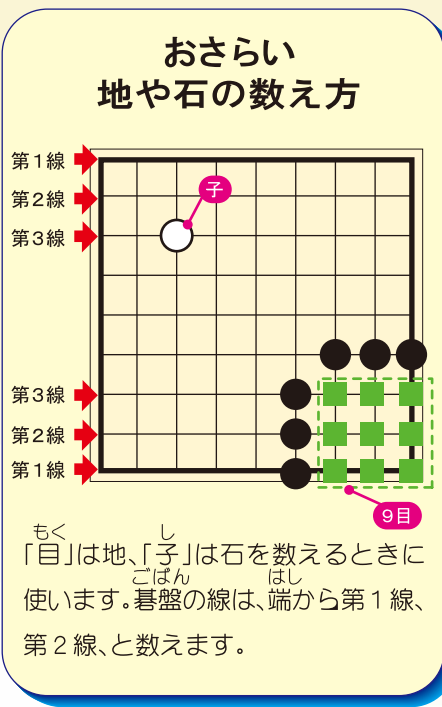
遥か四千年も遡る  
 中国で生まれ、日本  
 に渡った碁碁の文化、  
 清少納言もこう言  
 いました。碁碁を打つ  
 音は誠の気が漂つ…  
 「源氏物語」に登場し、  
 貴族の教養であった  
 碁碁文化。前人未到  
 の御城碁十九連勝。  
 秀策が心に刻みこむ  
 のは「碁碁十訣」。親  
 から貰った絶対音感  
 ならぬ、絶対碁感  
 兼ね備え。誠にもつ  
 て天上人となった本  
 因坊秀策でありました。

最後に本因坊家を継いでいた第二十一世本因坊秀哉は昭  
 和十三年に引退。それにより家元制は廃止。本因坊の名前は  
 日本棋院に譲られ、昭和十六年(一九四一)、「本因坊」は家元  
 からタイトル戦の名前に代わり、第一期本因坊戦が開催さ  
 れました。本因坊の名前をかけて今もなお最強の碁打ちた  
 ちがこのタイトルに向けて腕を磨きます。

## 碁碁の基本ルール その八 石をとると陣地が広がる



対局中に取った石を「アゲハマ」と言います。



「目」は地、「子」は石を数えるときに使います。碁盤の線は、端から第1線、第2線、と数えます。

このルールは、誰でも対等に対局ができるように、設けられているもので  
 す。「ニギリ」で対局者が使う石を決めることを説明しましたが、こ  
 れは碁碁の強さが同じレベルの人と対局をする場合に使われます。  
 強さの段階を「級」段で表しますが、対局者に力の差があるときは、  
 「置碁」という方法で始めます。これは対局前、碁碁の星に石を置き、  
 力の差があっても強者にハンデを与えることで対等な勝負が出来  
 るようにする方法があります。次に「互先」ですが、同じ強さのレベルの人  
 と対局するのです。「ニギリ」で石を決め、黒が白へ「コミ」を渡します。こ  
 れは基本的に先に打ち始める黒番が有利となるので、白に対して黒は七目  
 以上多い陣地を取らないと勝てない仕組みになっています。  
 ※「コミ」…六目半のハンデのコミ。



ほんいんぼうしゅうかくいごきねんかん  
本因坊秀策囲碁記念館

秀策の一生を知る

ゆかりの品々(尾道市有形民俗文化財)



ほんいんぼうしゅうかくしゅうぞう  
本因坊秀策肖像



慎始 始めを慎み  
克終 終に克つ  
視明 視ること  
無惑 明らかにして  
惑なし

ぼしあいう  
秀策母子愛用の  
ごばんごし  
碁盤と碁石

幼い虎次郎が、母・カメから碁の手ほどきを受けた碁盤。秀策母子は、一生この碁盤を大切に使い続けました。29歳の秀策が最後の帰郷をしたとき、この碁盤の裏へ書き残した4句は、対局に際しての心得をしることは、記した言葉として、今も語り継がれています。



しよじょう  
秀策より父母あての書状

秀策は江戸から因島の両親宛にたくさんの手紙を送りました。巻物にしてられ多くの手紙からは、親思いの秀策の人柄が伝わってきます。



秀策への改名許可証



栄齋 初段の免許状



しゅうさくじ ひつせん  
秀策自筆扇

あんせい  
安政4年(1857)、最後の

帰郷のとき、秀策が本因坊のおとうとでせとだにもとけんじろう弟弟子、瀬戸田の谷本兼次郎2段に贈った扇。対局後の心がまえを記した漢詩が書かれています。

橋本竹下「安田秀策の東行を送る」

ちっか  
帰郷から江戸に戻る秀策に、竹下が贈ったますます強くなる秀策をたたえる漢詩。

戦罷両奩収黑白 一坪處有虧成

たたか  
戦いが終わりの、一つの小箱(碁箱)に黒と白の石が片付けられる。碁盤の上には、いにも傷ついたり欠けたりしているところは一つもない。

丁巳晩夏 秀策



いごでんどうてん  
囲碁殿堂展(展示風景)

秀策16歳の筆跡書幅

げんぶん  
原文は、戦に勝った上杉謙信が、秋の月夜に意気揚々とした気持ちを詠んだもの。秀策は、謙信の気持ちに自分を重ねあわせながら、遠いふるさとを思ってこの漢詩を書いたのかもしれない。秀策は字もとても上手だったのですね。



しよくぜん  
秀策の食膳

ほんいんぼうあつめそうぞく  
本因坊跡目相続と、花との結婚を祝って、父が買った食膳。秀策が帰郷したときに使われたものです。



# やってみよう!知ってみよう!始めてみよう!

# ちびっ子秀策 虎ちゃん新聞

主な記事より

- 「囲碁」を市技に制定!
- いつかは秀策さんみたいに...
- 何歳からでも楽しめる囲碁
- あなたのきっかけはいつですか?

## 「本因坊秀策」のふるさと

### 尾道「因島くいのしま」



本因坊秀策 (1829-1862)

本因坊秀策のふるさと、尾道因島では昔から囲碁がさかんに行われていました。そして現代、平成九年に日本で初めて、「囲碁」を因島の市技に制定しました。因島市が尾道市と合併して、囲碁は尾道市の市技となりました。囲碁は、黒と白の碁石を交互に置くだけの、とてもシンプルな競技ですが、

## イベントあちこちまで

市内では、誰でも、何歳からでも楽しめる囲碁教室や、イベントがあちこちでくりひろげられています。



虎ちゃん囲碁まつり



本因坊秀策囲碁まつり

やればやるほど、その奥深い楽しさのとりこになる子どもたちも増えてきています。



囲碁の楽しさを、子どもたちにきいてみました。

囲碁記念館の教室に通う、因島の中嶋健人くん・山中凜々ちゃん。マンガ『ヒカルの碁』で秀策の存在を知って始めた囲碁、その面白さにすっかりはまっています。いつかは秀策さんみたいに強く...と夢を語る二人。秀策さんのどろろが好き?の質問に、二人の答えは「自分が病気のときでもひとの看病をする立派な人だから」「一度も怒ったことがない優しい人だから」。強さだけじゃない!亡くなって百五十年たっても子ども達があこがれる秀策さんの人柄。指導してくださるボランティアの皆さんも、お孫さんと同じくらいこの年頃の子がどんどん強くなっていくのを目を細めておられます。



子供が大人に挑戦できる楽しい囲碁

尾道では、全国大会出場への切符をつかんだこともある、小さな女流棋士も頑張っていますよ! 福島あきらちゃん。たまたま、お父さんがプレゼントしてくれたゲームの中に入っていた囲碁セットと運命の出会い。親子で遊んでいるうちに、どんどん楽しく、どんどん強くなってきました。今では将来の夢はプロの女流棋士。対局で碁盤を見つめる真剣な瞳は大人も顔負け。大好きなことをしながら、もともともと勉強して強くなりたい!とつてもステキなことですね。

囲碁の楽しさを沢山のお友だちにも知ってほしいとのこと。がんばれ、未来の秀策たち!

## ほんいん ぼうしゅうさく い ご き ねん かん 本因坊秀策囲碁記念館



尾道市因島外浦町121-1  
TEL:0845-24-3715  
開館時間/10:00-17:00  
定休日/毎週火曜、年末年始

平成20年開館。桑原家に伝わる秀策ゆかりの品々を展示しています。秀策の囲碁の強さだけでなく、碁に対する心構えにもふれられる記念館。秀策にあこがれて全国からお客さんが来られています。毎月第1・3土曜日には囲碁教室も開催されています。



◀ 秀策生家 旧生家の家相図をもとに再現された生家。虎次郎が、幼い頃いたずらをしてとじこめられたという押入れも再現されています。碁の対局やお茶室としても利用できます。



てんぱくりゅうおう  
天白龍王

母・カメが秀策の成功を祈り続けた祠。今も、石切風切神社裏、旧生家の場所に、江戸の方を向いて建っています。



けんしゅうひ  
本因坊秀策顕彰碑

秀策没後50年を記念して、石切風切神社境内に建てられた顕彰碑です。珍しい碁盤の台座に立つ碑の文字は、最後の本因坊・第21世本因坊秀哉によるものです。秀策の親族と因島の人たちが力を合わせて大正15年(1926)に建立しました。



ぼひ じ ぞういん  
秀策の墓碑(地藏院)

囲碁記念館の正面の山手の地藏院の桑原家の墓地に秀策のお墓があります。お墓には、囲碁の上達を願うファンが、全国からお参りに訪れ線香が絶えません。碁石がお供えしてあるのも、秀策のお墓らしいですね。